

くものいと

第 4 号
24-VII-1985
関西クモ研究会

東亜蜘蛛学会大阪大会記念号

中国クモ学者を迎えて

八木 沼 健 夫

昭和60年7月18日から7月25日の8日間、中国のクモ学者宋大祥氏（中国科学院動物研究所）と金振喜氏（河南養蠶研究会理事長でサソリの研究家）が来日された。ビザや手続の関係で最初の予定の2週間が短縮され、あわただしい訪問となった。概要を次に記録しておく。

7月18日 午後大阪空港着。通訳の姜涓さん（大阪女子大）と八木沼が出迎える。直ちに天王寺のホテルフジへ。夕食後天王寺付近を案内。二人とも日本語ができないので、通訳のいない時は話は宋さんと英語で。

7月19日 午前八木沼宅訪問。宋さんはハグモ科その他のクモを研究。金さんにはサソリの標本と文献を見せる。金さんとは中国語の筆談でしか話ができない。午後大阪市立自然史博物館へ案内。宮武頼夫氏の流暢な英語で説明していただく。再び八木沼宅へ。田中穂積氏来訪。宋さんとコモリグモ科についてディスカッション。ホテルフジ泊まり。

7月20日 京都立命館大学訪問。吉田真氏から生態について話を聞く。同道者は加村隆英氏、伊藤千都子氏、フランスで宋さんと知り合った京大の山森良枝氏。話は男性は英語で、女性はフランス語で。京都泊まり（吉田氏のお世話）。

7月21日 上記の方々の案内で京都観光。夕方大阪へ。午後5時からホテルコーホーで大阪付近のクモメンバー有志による歓迎懇談会（中国料理）。通訳は姜涓さん。（この日の模様は清水氏が執筆） ホテルコーホー泊まり。

7月22日 新幹線で東京へ。国立科学博物館分館訪問。上野俊一氏・小野展嗣氏のお世話になる。夜、小野氏ホテルに来訪、宋さんにカニグモについて指導。

ホテルサンパーク泊まり。

7月23日 東大薬学部訪問、中嶋暉躬教授や東京医科歯科大学学長の加納六郎教授に節足動物の毒についてご指導を受ける。続いて中原先生のご案内で東大総合資料館参観。午後、上野公園の国立科学博物館見学。萱嶋先生・通訳の加藤氏・大利昌久氏の奥さんが同道下さる。新宿ファーストホテル泊まり。

7月24日 大阪へ戻る。再び八木沼宅訪問。宋さんはもっばらくモの研究。金さんも文献を読む。八木沼家族と夕食を共にする。ホテルサンバ泊まり。

7月25日 朝早くから姜涓さんの案内で彼等二人はショッピング。大きなカラーテレビとラジカセを購入。午後、大阪空港発。妻さんと八木沼が見送る。

今回の中国学者来日に際し、ずい分多くの方々のお世話になった。

以上の文中に記した方々のほか、東京でのスケジュール前体についてはとくに、萱嶋先生・新海栄一氏、ホテルのあっせん（予約・変更・キャンセル・再予約）には新海栄一氏・小野展嗣氏、訪問先の交渉紹介については上野俊一氏・大利昌久氏のお世話になった。また彼等の復路の航空券入手については大阪四天王寺学園高校の坂本昭仁氏・山野忠清氏の一方ならぬお世話になった。ここにあわせて厚くお礼申し上げます。

来日の1ヵ月前から八木沼は外務省との折衝手続・入国管理局との交渉、数回のファクシミリ電送、通訳探し、ホテル探し、そして滞在期間中の同道と身体的・精神的・言語的に疲れたが、短い期間ながらクモ学において彼等と接触できたことは喜びであった。

〔追記〕宋さんが日本へのおみやげとして別刷数種各数部を戴いたが、学会その他東京で直接お世話になった人が多く、分けるとわずかずつしか当たらなかったが、関西研究会へも次の3種を戴いたので清水さん方で保管していただく。

1. 宋大祥ほか, 1982. 東亜鉗蝎的形態和習性. 生物学通報, 1982 (2) : 22-25.
2. 宋大祥・陸林, 1985. 我国数種卷葉蛛記述 (ハクモ科). 動物学集刊, 3 (3) : 77-83.
3. Song, D., & J. Haupt., 1984. Comparative morphology and phylogeny of Liphistiomorph spiders. (Revision of new Chinese Heptathelid spiders.) Verh. naturwiss. Ver. Hamburg. (NF) 27 : 443-451.

今後別刷などできましたら、クモに関しては宋さんに送ってあげてください。

宛先：中華人民共和国 海淀中関村 中国科学院動物研究所

但し、8月2日から10月末まではニューヨークのAmerican Museum of Nat. Hist. へ Dr. Platnick 気付で、Mr. Song Daxiang. % Dr. Platnick (entomology) . American Mus. Nat. Hist. Central Park West at 79th St. New York, N.Y., 10024, U S A

宋大祥・金振喜両氏を大阪に迎える

清水裕行

7月21日夕方、大阪道頓堀のホテルコーホーにおいて、関西クモ研究会有志による宋大祥・金振喜両先生の歓迎会が催された。八木沼先生が「歓迎、歓迎。你們到日本来！」と中国語で挨拶された後、中華料理のテーブルを囲んで皆で歓談した。両先生は各地で中国料理を食べたが、ここのは本当の北京料理とのことである。(因に、中国語の「料理」は「処理する、後始末する」という意味で、食事の意味は全くないということである。中国料理は「中国菜」「中菜」「中餐」などという由)

宋大祥先生は次のように中国のクモ研究の現状を話された。中国のクモ研究は実質10年で、八木沼先生の50年に比べてもはるかに遅れている。現在、研究者は約100名で、1983年に雲南省で「第1回中国クモ研究会」が開催された。来年秋には中国クモ学会が設立される予定である。これは中国動物学会の分会として活動する。創立大会には皆さんも是非参加してほしい。現在、科学院では2名の大学院生がコモリグモとカニグモの研究をしている。また、湖南大学や長春でも大学院生が研究を始める予定である。

金振喜先生はサソリの研究家であるが、本職は実業家で河南省で会社・ホテル・商店を手広く経営されているという。日本ではサソリの応用研究というと、毒性とか駆除を思い浮かべるが、金先生は逆に増やす方の研究をされている。中国では漢方薬の材料にするために農家でサソリを養殖するのが流行している。サソリは騒音に弱いため、最近では道路の発達で環境が悪化して減少の傾向にある。キョクトウサソリを10万匹飼育している。これを煎じ薬や薬酒にして服用すると、百種類以上の病気に効く。夫人の病気をサソリで治したのがきっかけで研究を始められ、事業も資金稼ぎのためだとのことだった。(10頁へ)

細蟹舎通信 [7]

ササガニノヤ ツウシン

八木沼健夫

八木沼研究室にはいった情報を次に掲げる。(今回は中国関係のみ)

最近発表された中国のクモの新種

- *Atypus suiningensis* Zhan, 1985
(張永晴)
- *Atypus heterotheus* Zhan, 1985
(張永晴)
- *Spermophora yandongensis* Hu, 1985
(胡金林)
- *Phrynarachne huangshonensis*
Li, Chen et Song, 1985
(李反才・陳発揚・宋大祥)
- *Titanoeca asimilis* Song et Zhu,
1985 (宋大祥・朱明生)
- *Ajimonia auritus* Song et Li, 1985
(宋大祥・陸林) [ハグモ科]

以後、追加もあると思うので、それらは今回の分をも加えて、*Atypus*次号にまとめて掲げる予定。

中国では次々と新種の発表があり、すでに1000種を超した。

分類関係の方々に、所望の文献をご指示下されは、原記載のコピーを作ります。

中国蜘蛛学会

かねてから計画中であった中国蜘蛛学会は、ようやく政府の許可があり、来年にはその発会式が予定されている。

韓国にも蜘蛛研究所(ソウル)ができた。こうなると、わが学会も会名を変更しなければならないだろう。

中国の蜘蛛学の大家4人が日本へ

第1回は文在根氏と趙敬釗氏が、第2回は平長民氏が今年科学万博に来られました(会う機会はなかったが)。そして第3回は宋大祥氏が来日された。大抵のうら宋伝典氏以外は日本に来られたことになる。

宋大祥氏アメリカへ

日本で多くの方がたにお会いいただいた宋大祥氏が8月2日招聘により、アメリカのニューヨークにあるアメリカ自然史博物館に3ヶ月の予定で留学され、Platnick博士の指導のもとにクモの研究をされることになった。日本を引揚げて間もない出発であったが、今後の研究の成果が期待される。宋大祥氏への連絡はAmerican Museum of Natural HistoryのDr. Platnick 気付で。(詳細別記)

茶園のクモ類余話

奈良県農業大学校 寺田孝重

筆者は、1976年春より数年にわたって、茶園を対象にクモ類の調査を行ってきました。その間に見聞きしたことで、おもしろく感じた事柄を紹介してみたいと思います。

第1話 茶園はクモの幼稚園?

茶園は御存知の方もあるかもしれませんが、密植したチャの木をカマボコ型に仕立ててあります。うねの内部は枝葉がこみ合いながら茂っています。このような並木状のものが20~50m続いて1本のうねとなります。うねとうねの間隔は通常1.5~2.0mはなれており、この通路を通して管理が行われますから、うねとうねがひっついてしまうことはありません。しかし、年に2~4回新葉が一番茂った時には極接近することがあります。さらに年間2~5回大きく刈込む作業がくり返されますので、樹冠の内部にまで頻繁に人手が入ります。このような管理は永年作物の中でも特殊な例と言えるでしょう。

それで、茶園のクモ類の調査を始めた時に、すでに先行されていた果樹園や水田でのクモの調査報告はあまり参考にならないかも知れないと思いましたので、茶園でとれた(採集方法はビーティング法)クモは御迷惑でも逐一、八木沼先生に見ていただいております。(もっとも当時の筆者では、普通種のクモの検索すらできませんでしたから。)

10日に1回の割でクモを採集し、頭数をチェックした後2ヶ月分位をもって先生のお宅へ伺いました。偶然、筆者の家は、先生のお宅と自転車で15分位の近くでしたので、せっせと通いました。そして、4回目位だったでしょうか、初冬の頃先生が「寺田君、茶園と言うのは、クモの幼稚園とちがうか。属名も分からん幼生ばかり持ってくるやないか」と言われました。

たしかに、採集されるクモの大半が、ヒメグモ科、フクログモ科などに属する幼生なのです。最初は、前述したように、茶園は枝葉がこみあっていて、狭い空間しかないので、大きな巣は張れないから、小型のものしかいないんだろうぐらいに考えていましたが、体の比較的大きなカニグモ、ササグモ、ハエトリグモなどの仲間も幼生が多いので、だんだん、生活空間と云う理由だけでは説明がつかなくなってきました。それでは、茶園はクモにとって特に産卵し易い場所なので

しょうか。なるほど、ヤミイロカニグモ、ササクモ、クリチャササグモが茶園でたしかに産卵しておりますし、コモリグモも子守をしながら敷ワラの上を走っているのを見ましたが、茶園でクモの卵のうが、そう高い頻度で見つかるわけでもなく、真相はなぞのままといったところです。

第2話 クリチャササグモの謎

採集場所を定めて、植物や動物を調査しておりますと、おのずからその地に特有の種の組合せが見出されます。これを「相」と呼びます。この相の中で数的に上位を占めるものを優占種といい、奈良の茶園のクモ相ではネコグモ、ユウレイグモ、ササグモ、クリチャササグモ、アサヒエビグモ、ヤミイロカニグモ等がこれに当たると思われます。このデータは、少なくとも奈良市矢田原町の茶業分場内茶園で1年間にわたって採集した結果ですので一時的なものではなく、ある程度恒久的な状態を反映していると考えていました。

その後も機会のあるたびに各地の茶園でクモ採集を行っていました。このような旅先でデータは断片的なものではありますが、中国の浙江、江西、広東省や九州の佐賀、長崎、宮崎、熊本県のものが集まってきました。これらの結果からも、筆者が奈良で見出したクモ相はほぼ属のレベルで茶園の特徴を一応反映したものと思っておりました。

ところで、お隣の三重県で貝発さんが、やはり茶園において1年間採集をされたのですが、その結果は採集方法の違いを考慮すればよく似ているのですが一点決定的に違っていたのがクリチャササグモの欠落でした。奈良ではササグモとクリチャササグモ（以下クリチャと略します）が勢力を二分しているのに三重では1頭のクリチャも採集されていないのです。クリチャは八木沼先生が、ササグモから分離されるまで、ササグモとして扱われ、幼生の間はほとんど区分できませんが、成体の区別は比較的楽です。

ササグモ属は茶園環境には適した種族らしく、中国では浙江、江西省の茶園で見られますし、九州各県の茶園からも多く採集されてきますが、なぜかクリチャは今の所いないのです。奈良の場合も茶園周辺の林でクモを採集してもクリチャは見当たりません……しかし茶園には沢山いると思っていたのです。

こうなりますと、貝発さんの観察がより一般的なもので、クリチャを優占種にまで持ち上げたのは筆者のいさみ足でしょうか。この点について、貝発さんとも

話をしましたが、はっきりした結論は出ませんでした。距離的にもごく近い、同じ茶園と云う環境の中でも、生物相は不思議な変化を見せるものだと感じました。

クモ毒とヒトの精液

大崎 茂 芳

タランチュラやシドニー漏斗巣グモの毒成分を調べてみると、必ずポリアミンであるスペルミンが含まれている。このスペルミンは、ハブ毒にも数%レベルで含まれている。スペルミンの毒性テストでは、ねずみに投与し半数が死ぬ致死投与量は体重1 kg当たり56mgという結果もでており、スペルミンはかなりの毒性を持っていることがわかる。

ところで、驚くべきことには、クモやハブ毒の成分であるスペルミン（ベッタガの精液晶ともいう）が人間の精液にも多く含まれている事実である。

クモ毒が血管に入るとかなり危険なように、ヒトの精液が血管に入ると同じく危険であることが予想される。毒成分を体内に持つ人間は、かなりきわどい生き方をしているのかもしれない。

ツノオニグモの中国名

清水 裕 行

中国の『白求恩医科大学学報』のクモ特集号（1983）の154頁に黒竜江省からのツノオニグモの報告があります。このクモの中国名が「津野園蛛」となっています。「園蛛」は“garden spider”の意識でオニグモのことですが、「津野」は「ツノ」を音訳したもののようなようです。ただし、「津野」を「ツノ」と読むのは“訓読み”になります。「ツノ」は原記載に“tsuno means a horn”とあるように「角」のことです。なぜ「角園蛛」としなかったのかはわかりませんが、いずれにしてもよほど日本語に堪能な方が命名したのでしょう。なお、現代の「簡化字」では「園」は国構えの中に「元」を書きません。「元」（＝円）があるので、「角」（元の10分の1）はいらないということでしょうか。

吉野山のクモ (2)

(1) 吉野山 1984. 7.25 -26. 八木沼健夫

イエユレイグモ、オオヒメグモ、オナガグモ、チリイソウロウグモ、コガネヒメグモ、ヒメグモ、マルズメオニグモ (♂)、ワキグロサツマノミダマシ、ヤマシロオニグモ、サツマノミダマシ、コガタコガネグモ、ギンナガゴミグモ、ゴミグモ、ヨツデゴミグモ、シロオビトリノフンダマシ、アカイロトリノフンダマシ、ジョロウグモ、オオシロカネグモ、キララシロカネグモ、ヒラタグモ、クサグモ、イオウイロハシリグモ、キハダカニグモ、ネコハエトリ (八木沼、下線は注目すべき種)

(2) 1984年8月4-5日、本会会員を中心にした有志による恒例の吉野観察会が催された。

〔主な収獲〕

- コケオニグモ：幼体。吉野では2度目。(渡辺好章)
- コガネグモ：4日、美吉野の前の道路わき。吉野では昭和25年(八木沼)以来、誰もとっておらず、みてもいない。コガタコガネグモの大きさだったので、コガネとは思にくい。しかし、完全にコガネの成♀。34年ぶりの記録。何かについて来たのかもしれない。それにしても小さい。コガタコガネはまだ成熟していない。これは大ニュースである。(八木沼)
- トリノフンダマシ類：加村によるトリノフンダマシの♀は昼間のピーティング、他は夜間採集よる。
 - トリノフンダマシ：加村隆英(1♀、1♂)、野戸章(1♀、1♂)。
 - オオトリノフンダマシ：清水裕行(1♀)。
 - シロオビトリノフンダマシ：野戸(1♀)、清水(2♀)。
 - クロトリノフンダマシ：清水(1♀)。
 - アカイロトリノフンダマシ：野戸(1♀黒色型)、清水(1♀)。
- スズミグモ：きまぐれ分布で有名。加村(1♂、如意輪寺付近)、清水(2♀、ささやきの小径、1頭は網に径約10cmの楕円状のかくれ帯をつけていた)。

〔確認したクモのリスト〕

- ガケジグモ科 セスジガケジグモ
- ウズグモ科 マネキグモ、カタハリウズグモ、ウズグモ
- タマゴグモ科 ダニグモ
- ヒメグモ科 カグヤヒメグモ、オオヒメグモ、アシブトヒメグモ、オナガ
グモ、チリイソウロウグモ、ヤリグモ、カニミジグモ、スネグロオチバ
ヒメグモ、ヒザブトヒメグモ、ヒメグモ、バラギヒメグモ
- サラグモ科 オオスギヤミサラグモ、アシナガサラグモ
- コサラグモ科 アリマネグモ
- センショウグモ科 センショウグモ
- コガネグモ科 コケオニグモ、トガリオニグモ、ヤミイロオニグモ、ワキグ
ロサツマノミダマシ、イエオニグモ、ヤマシロオニグモ、サツマノミダマ
シ、ズグロオニグモ、コガネグモ、ナガコガネグモ、コガタコガネグモ、
ギンメッキゴミグモ、カラスゴミグモ、ゴミグモ、ギンナガゴミグモ、ヨ
ツデゴミグモ、トリノフンダマシ、オオトリノフンダマシ、シロオビトリ
ノフンダマシ、クロトリノフンダマシ、アカイロトリノフンダマシ、スズ
ミグモ、トゲグモ、ジョロウグモ
- カラカラグモ科 ヤマジグモ
- アシナガグモ科 オオシロカネグモ、キララシロカネグモ、アシナガグモ
- ヒラタグモ科 ヒラタグモ
- タナグモ科 クサグモ、コクサグモ、メガネヤチグモ
- キシグモ科 アオグロハシリグモ、スジアカハシリグモ、イオウイロハシ
リグモ
- コモリグモ科 ハリゲコモリグモ（I型）、クラークコモリグモ、チビコモ
リグモ
- ササグモ科 ササグモ
- カニグモ科 コハナグモ、ハナグモ、キハダカニグモ、ワカバグモ、セマ
ルトラフカニグモ
- ハエトリグモ科 ムツバハエトリ、ネコハエトリ、マミジロハエトリ、ウデバ
トハエトリ、デーニッツハエトリ、オオハエトリ、シラヒゲハエトリ、マ

ガラスジハエトリ、ミスジハエトリ

フクログモ科 イタチグモ、コムラウラシマグモ

アシダカグモ科 コアシダカグモ

アワセグモ科 アワセグモ

シボグモ科 シボグモ

〔参考〕 これまでに採れた希少種

キノボリトタテグモ（八木沼・住居）、ヨリメグモ（西川喜朗、座古禎三ほか）、ナンブコツブグモ、イシサワオニグモ、コケオニグモ、ハラビロミドリオニグモ（西川・八木沼 各1回）、マメイタイセキグモ（八木沼・2回、1回は卵のうつき）、カマスグモ

〔例会報告〕 ビデオ鑑賞会

1984年11月18日、追手門学院大学視聴覚教室において、クモを扱ったテレビ番組のビデオ鑑賞会を開催した。「自然のアルバム」「生きものばんざい」「わくわく動物ランド」「知られざる世界」等で放映されたクモの映像が持ち寄られた。最近ではテレビでもクモが扱われることが多くなり、クモの本当の姿（特に毒性の問題に関して）が一般にも認識されてきている。外国のクモに関しても直接取材したものに基ついて編成したものが増えて、解説にも以前のような誤りや興味本位のは少なくなった。（但し、新聞の予告欄には多分にセンセーショナルなタイトルが目につくが）この他に、アメリカのテレビで放映された画像も紹介された。これにはイギリスのBBC放送の映像が多く採用されており、日本の番組と同じネタのものもあった。

今回の企画はなかなか好評で、紹介しきれなかったものも多いので、機会をみてまたやってみたい。

（参加者）吉田真、山野忠清、大崎茂芳、金野晋、早川岳人、本田重義、野戸章、加村隆英、渡辺好章、八木沼健夫、寺田孝重、西川喜朗、田中穂積、四ノ宮靖大・万里依と御両親、清水裕行（順不同）

（3頁より）参加者：吉田真、山野忠清、野戸章、加村隆英、渡辺好章、八木沼健夫、寺田孝重、田中穂積、垂水有三、座古禎三、清水裕行、通訳・姜淳